

出張報告届

2025年 5月 9日

吹田市議会議長様

会派名 参政党  
代表者氏名 久保 直子  
出張者氏名 久保 直子  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

下記のとおり出張したので届け出ます。

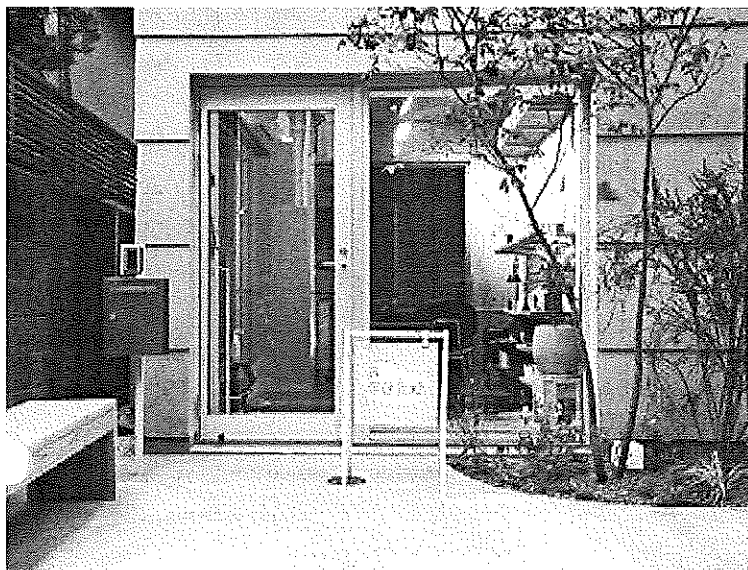
記



出張先	神奈川県川崎市中原区上新城2-7-5 セシーズイシイ23A101
期間	令和7年4月25日 から 4月25日まで 1日間
出張の成果	別紙のとおり
備考	

# 報告書 「社会的処方 視察」

参政党 吹田市議会議員 久保直子



西 智弘講師

一般社団法人プラスケア 代表理事

川崎市立井田病院 腫瘍内科 部長。2005年北海道大学卒。室蘭日鋼記念病院で家庭医療を中心に初期研修後、2007年から川崎市立井田病院で総合内科／緩和ケアを研修。その後2009年から栃木県立がんセンターにて腫瘍内科を研修。2012年から川崎市立井田病院に勤務。現在は抗がん剤治療を中心に、緩和ケアチームや在宅診療にも関わる。また一方で、一般社団法人プラスケアを2017年に立ち上げ代表理事に就任。「暮らしの保健室」「社会的処方研究所」の運営を中心に、地域での活動に取り組む。日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医。著書に『だから、もう眠らせてほしい（晶文社）』『社会的処方（学芸出版社）』など。

令和7年4月25日（金）

暮らしの保健室

（川崎市中原区上新城2-7-5 セシーズイシイ23 A101）

○社会的処方とは・・・

薬で人を健康にするのではなく、社会的処方という人と人とのつながりで人を元気にする仕組みのことを言います。

○「暮らしの保健室」・・・

地域コミュニティ作りを「暮らしの保健室」という名称で展開しています。

病院に行くほどではないちょっとした悩みや、がんや認知症など大きな病気を抱えてどうやって生きて行けばいいの？など病院では相談しにくい悩みを、町中で気軽に相談でき、つながれる場。

武蔵新城を中心に

このまちが「病気があってもなくても安心して暮らせるまち」になることを目指して

暮らしの中で、誰かに話を聞いてもらいたい。

「相談」というほど大ごとではないのだけれど、ちょっと立ち寄ってコーヒーを飲みながらお話ができる場所。

——それが「暮らしの保健室」

「とりあえず、あそこに行けば話ができ、いつでも誰かとつながれる」と安心してもらえるまちを作りたい。

医師や看護師、介護や栄養に詳しいスタッフが、待っていました。

【講演 暮らしの保健室・川崎 ～その人の決めていく時間を共に過ごすための仕組み～】

(1) 要介護状態になりにくい人

運動する・しないより、仲間がいるかがポイント！

(2) 暮らしの保健室でやっている事≠相談＝あなたをひとりにしないこと

(3) 「孤立」という現代病

長寿化・単身世帯増加・ひとり親増加・都市化⇒物理的孤立  
社会的孤立  
精神的孤立

(4) 「がん」と診断されたとき

・社会や友人と切り離され、孤立する患者たちがいることに悩む：診察室・病院では解決できない問題  
つまり、社会と切り離される人が多い

(5) 病気になっても安心して暮らせる町

・コミュニティナースを中心とした相談支援

※コミュニティナース：病院でも診療所でも保健所でもなく、働く場所は「あなたのそば」というナース

・病院や医療制度の枠を超えて、医療者と気軽に繋がれる

・相談があってもなくても、ふらっと立ち寄れる「保健室」がある→日常生活の延長線上に、「住民としての医療者」がいる

・学校に「保健室」があるように、大人にも保健室が必要

・雑談・日常の話ができる所が大事

(6) 暮らしの保健室・川崎のクレド ※クレド：行動理念

・まちでの日常の中で

つながりたいときにつながる

木陰のような場としてありつづけ、

その人の決めていく時間を共に過ごす

屋根のある×アドバイス×支援・支援される×伴走×共に歩む×背中を押す×月一×不定期×

## (7) 課題

- ・暮らしの保健室：名前のハードル高い、孤立の人に情報が入らない  
⇒町のネットワークを創る

## (8) 健康サポート

- ・Aさんの病状を公表してみんなで理解、みんなでサポート！

Aさん：糖尿病を患い、HbA1cが12を超える時もあったが、暮らしの保健室でサポートを始めて3か月でHbA1cが6.5まで改善され、その後も維持

## (9) 視察を終えて

こちらの町を散策して感じたことは、小売店が多いということ。駅前によくあるチェーン店や大型店よりも、地元の方のお店屋さんが多く、入りやすい雰囲気でした。それは、こちらの地主さんが積極的に地域の為に店舗を仲介するなど、地域の為に貢献されているからこそ実現できたことでした。

例えば、カフェがあります。そちらを設計・建築するのもこの町の工務店です。また、みんなが立ち寄れる町の小さな図書館があったり、一日店長ができるバーがあったりと、歩いていても温かく心地よい雰囲気がありました。その図書館の本には、自分の感想を書き込むことができ、書き込みを通じて人とつながることができます。そのバーは、「やってみたい！」と思ったときに、気軽に挑戦できる所が魅力で、この町なら様々な夢や可能性が実現できるというワクワク感がありました。

人は、孤独であるとき、自分自身と一緒にいることができ、孤独の中でこそ、自分自身と対話し、ものを考えることができます。でも時に、人はそんな自分自身と一緒にいられない場合があります。それが「寂しさ」なのです。孤独そのものが悪いのではなく、自分自身と一緒にいられないようなとき、「誰かとつながりたい」と思ったときに、自由に他人と過ごすことができない「望まない孤独」が問題なのです。子供が砂場で遊ぶとき（孤独）、振り向いた時に親がいる（安心）、この心理の様に、「誰かが自分とつながり続けてくれると信じられる社会」を広げていくという事が吹田市でも出来たらと思いました。資金源は、寄付金・会費・委託金・助成金（川崎市民活動センター）、ということですが、お金・人・場所があればできるこの活動の吹田市での実現に向けて学べたことを、今後も活かしたいと考えます。

参政党 吹田市議会議員 久保直子

